

課題名：多機能型見守りセンサの導入目的に応じた活用モデル構築と効果創出プロセスの可視化を目指す実証研究

代表機関／代表者：国立研究開発法人国立長寿医療研究センター／加藤健治

分担機関：藤田医科大学

研究期間：令和7年10月～令和9年3月

研究開発目的

- 多機能化が進む見守りセンサについて、施設種別およびケア目的に応じた効果的な活用方法（使いこなし）を明らかにする。
- 習熟施設・非習熟施設の比較を通じ、活用モデルと効果創出プロセスを体系化する。
- 成果をもとに、施設導入初期層向けの活用ガイドライン案を策定する。

取り組み

- センサ活用に習熟した施設（特養・老健各3施設）でのヒアリング・観察による習熟知の抽出。
- 非習熟施設（特養・老健各10施設）での前向き介入研究（導入前後約9か月評価）。
- AIによる表情・発話解析を活用し、従来評価困難だったQOL変化の兆しを定量化。
- 成果を統合し、ケア目的別・施設文脈別のセンサ活用ガイドラインを作成。

期待される成果

- 施設のケア目的に応じたセンサ活用モデルの構築。
- 介護職員の業務効率化・心理的負担軽減。
- 高齢者のQOL・満足度の向上。
- 「エビデンスに基づく介護テクノロジー活用ガイドライン（案）」を社会実装につなげ、介護現場での普及促進を図る。

多機能型見守りセンサ（施設）



見守りセンサ（施設）は、離床検知、転倒検知、睡眠・体動解析、バイタルモニタリングなどの機能を持ち、AI解析や介護記録システムとの連携によって多機能化が進む。

見守りセンサ活用における習熟プロセスと効果創出の関係



見守りセンサの導入目的に対し、介護職員の「見方・解釈・判断・行動」の習熟プロセスを通じて目的に即した効果が生み出されることを示す。